

私、伊賀瀬雅也は、台湾、台中、National Chung Hsing University で開催された The 8th Joint Symposium of Veterinary Research among University of Veterinary Medicine in East Asia に参加しました。参加の目的は、本研究室における研究内容の発表と、他の大学の大学院生との意見交換および情報収集です。発表内容は、英語での口頭発表でした。本シンポジウムには、アジアの獣医学部をもつ大学が参加しており、Seoul National University, National Taiwan University, National Ping Tung University of Science and Technology, National Chia-Yi University, Asia University などの日本以外の大学も多く参加しています。そのため、本学会での発表は、英語でのコミュニケーション能力、プレゼンテーション能力を必要とし、国内では少ない貴重な経験が可能でした。

私たちは、これまでに犬の癌細胞に対するレオウイルスを用いた腫瘍溶解性ウイルス療法について研究を行ってきました。これまでの研究では、*in vitro* と *in vivo* において犬の様々な癌種に対する感受性を評価し、肥満細胞腫、組織球肉腫、乳腺腫瘍、メラノーマ、リンパ腫について治療対象になり得ることを明らかとしました。次に山口大学倫理委員会の承諾を得た後、オーナーの了承が得られた担がん犬 19 症例に対してレオウイルスを投与し、その生体に対する安全性および治療効果について検討を行いました。投与後に認められた副作用については、獣医癌グループの作成したガイドラインに基づいて評価を行いました。結果は、認められた副作用は全て軽度のものであり、19 例中 8 例では全く副作用が認められませんでした。治療効果については、幾つかの症例で明確な腫瘍の溶解、退縮が認められ、また投与部位における抗レオウイルス抗体の免疫染色で、腫瘍細胞内でのウイルス蛋白が検出されています。特に今回の発表にて、実際の写真等を示したメラノーマ症例では、とてもよく治療に反応したものの、腫瘍の増殖スピードに追いつかず、最終的には、脳への転移等が認められ、臨床試験から離脱しました。

そこで、私たちは、レオウイルスの抗腫瘍効果を増強する新規薬剤の探索を目的に、ドラッグライブラリーを用いたスクリーニングを行いました。そこで、得られたシグナル伝達阻害薬について、その併用効果を解析し、レオウイルスの併用療法に対する新たな知見を聴衆に提供できました。今後はさらなるメカニズム解析を実施し、犬のメラノーマに対する新規治療オプションとして臨床応用していきたいと考えています。最後に、山口大学連合獣医学研究科の同僚との写真を添付しておきます (図)。海外で同じ時間を共有することで、より一層仲が深まったと思います。今後もお互いに切磋琢磨しながら、研究を進めていきたいです。

☒

